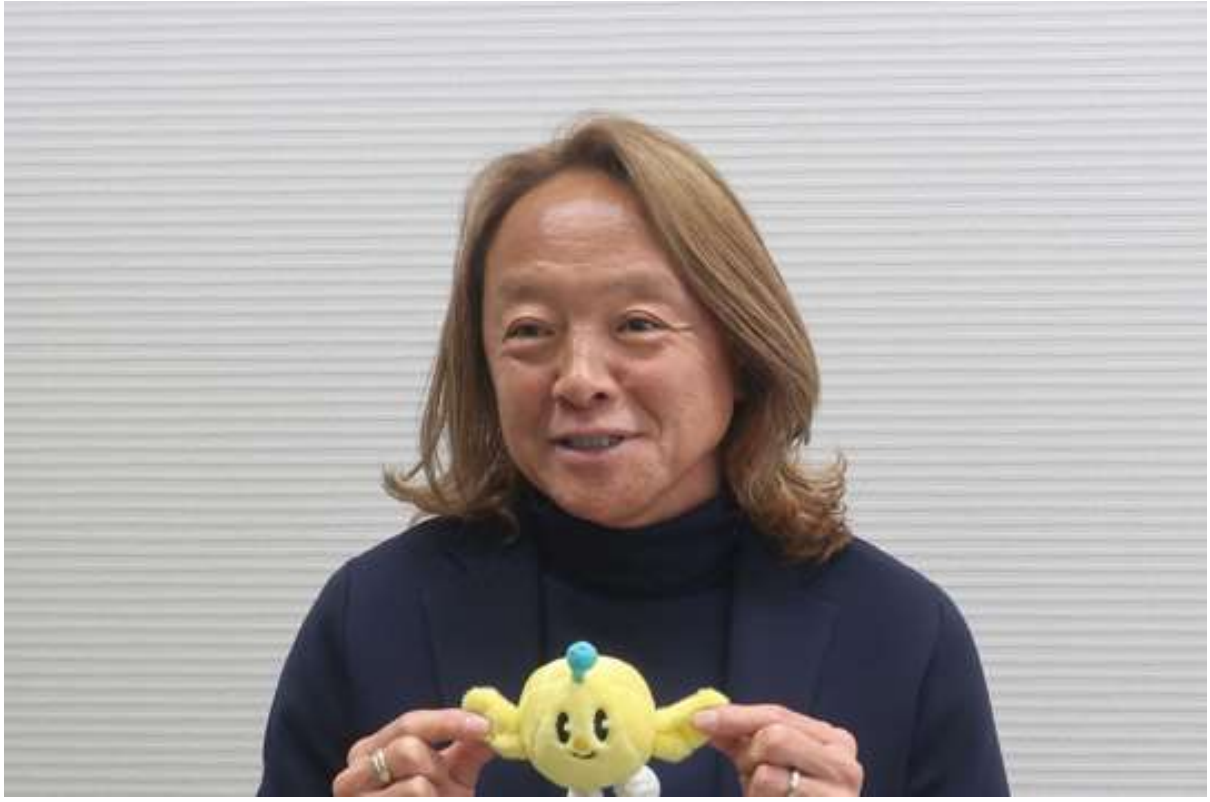
大切なのは、「理解する」こと

元サッカー日本代表で、数々の国際試合でも活躍した北澤豪さん。
引退後は、すべての人がスポーツを楽しめる環境づくりに力を注ぎ、障がい者サッカーの普及や、子どもたちへの指導を積極的に行っています。



北澤　豪（きたざわ　つよし）
1968 年東京都生まれ
サッカー元日本代表
2012 年～　（公財）日本サッカー協会理事
2012 年～　（公財）日本サッカー協会参与
2016 年～　（一社）日本障がい者サッカー連盟会長

ー北澤さんは、障がい者サッカー連盟の会長としてご活躍されていますが、会長に就任された経緯についてお聞かせいただけますか？

サッカーを通して世界を見たとき、日本のスポーツ環境に違和感を覚えていました。海外では、障がいの有無にかかわらずスポーツは平等なものであり、障がい者スポーツと区別されることが少ないからです。

2002 年の日韓ワールドカップと同時期に「もうひとつのワールドカップ」と呼ばれている、知的障がい者のワールドカップも日本で開催されました。そのとき、日本は健常者と障がい者で別々のユニフォームでしたが、イングランドやオランダの選手たちは、同じユニフォームを着ていました。これは、私が現役選手で世界を巡っているときも、海外ではスポーツは障がいの有無で分けられているものでは無かったので、その違和感をずっと感じていました。

また、中学時代は海外志向の強いチームでプレーをしていました。そのチームでは、目がみえない子や耳がきこえない子など、障がいのある仲間たちとも一緒にサッカーをしていました。

海外ではこうした環境は珍しくありませんが、日本ではあまり見られず、その違いにも違和感を覚えました。

スポーツは限られた人のものではなく、誰にとっても平等である、その思いが活動を始めたきっかけです。

―会長として、どのような思いを持って活動されていますか？

　スポーツには教育的な要素も含まれているので、学校教育の中で子どもたちがインクルーシブな考え方を取り入れ、当事者と一緒に活動することで、障がい者理解が深まるのではないかと思います。

　障がい者スポーツは、どうしてもマイナスのイメージで捉えられてしまう。そうではなく、「すごさ」に目を向けてほしい。「きこえない」「みえない」といったことが、単なるマイナスではなく、逆に強みとなる場合もある。そうした視点を持つことで、学校教育の中でも、子どもたちが障がいはかわいそうと思うのではなく、新たな見方に気づくことができるはずです。これは、スポーツを通じた教育の重要なポイントのひとつではないかと感じます。

手話を使って参加者と交流する北澤豪・障がい者サッカー連盟会長
＝一般社団法人日本ろう者サッカー協会提供

特に、子どもたちは柔軟に物事を理解する力を持っているので、デフスポーツ体験などの機会を通じて、新たな気づきを得ることができるのではないでしょうか。

また、スポーツの世界では、指導者が障がいについて正しい知識を持つことが重要です。指導者が知らなければ、障がいがある選手を受け入れることが難しくなってしまいます。

現在、サッカーの分野では、指導者向けの講習や研修の場に「障がい者理解」を専門とする講師を招くなどの取組が進められています。

そうした知識を持つことで、障がいのある選手が安心して受け入れられる環境を整えることができるのです。

ジェスチャーゲームで参加者と交流する北澤豪・障がい者サッカー連盟会長
＝一般社団法人日本ろう者サッカー協会提供

―これまでの活動の中で、特に力を入れて取り組んできたことは何でしょうか？

障がいのある方がスポーツにもっと関われるようにするためには、スポーツによりアクセスしやすい環境を整えることが重要です。これは、スポーツは平等なものという観点からも必要なことですが、それ以上にスポーツを楽しめる環境を整えることが大切だと考えています。

さらに、スポーツを経験した人がきちんと仕事に就ける社会をつくる必要があります。そのためには、企業の理解が欠かせません。多くの企業が障がい者理解に取り組んでいるのも、こうした考えが背景にあるからだと思います。スポーツを続けたくても、仕事がなければ生活が成り立ちません。日本の選手たちも、スポーツを続けるには経済的な負担が大きく、単なる「夢」だけでは続けられないのが現実です。だからこそ、教育の段階から障がい者への理解を深め、社会全体で受け入れることで、企業の理解が進み、障がい者雇用の促進につながる。このような循環をどうつくるかが、スポーツの大きな役割の一つだと考えています。

私たち日本障がい者サッカー連盟も、スポーツの環境整備に取り組んでいます。特に、現在は「仕事のロードシェア」が最も重要な課題の一つだと考えています。

―いよいよ、東京 2025 デフリンピックが 11 月に開催されますが、障がい者サッカーの中でも、デフサッカーにはどのような魅力や可能性があるとお考えですか？

日本のデフサッカーは非常に高い競技レベルを誇り、世界の舞台で数多く戦っています。男子は 2023 年のデフサッカーワールドカップで準優勝、2024 年のアジア太平洋ろう者競技大会で優勝。女子もフットサルですが、2023 年のワールドカップで優勝するなど、男女ともに高い実力を持っています。そのような実績からも、デフサッカーの競技レベルの高さを感じていただければと思います。

スポーツイベントでデフサッカー選手らと記念撮影
＝一般社団法人日本ろう者サッカー協会提供

障がい者のスポーツ大会というと、もしかしたら競技レベルが低いのではないかと思われるかもしれません。しかし、デフリンピックは、どの競技も非常にハイレベルで、むしろ「きこえる選手と一緒に

戦うべきではないか」と思うほどの実力を持つ選手が揃っています。
　実際に競技を見たら、「レベルがすごい高い」と感じると思います。それほどの競技力をつけるため、選手たちは日常的にきこえる選手と同じ環境で練習を積んでいるのです。

　手話がわからなくても、口の動きを読んだり、大きなジェスチャーで伝えたりすることで十分に意思疎通ができます。そうしたことをもっと多くの人に知ってもらいたいです。英語が話せないからといって、外国人とコミュニケーションが取れない訳ではないのと同じように、音声での会話が難しくても、コミュニケーションは取れるのです。多くの人は「100%のコミュニケーションが必要！」と考えますが、実際には100%でなくても、ある程度理解し合うことはできます。
　テレビでも手話通訳が登場する場面が増え、飛行機などの公共機関でも案内表示が整備されつつあります。それでも、まだまだ改善が必要です。手話通訳の配置を増やし、より多くの場面で手話が浸透していくことが求められています。
　また、災害時にはサイレンの音がきこえない人もいます。こうした場合に、どう情報を伝えるかを考えることは、デフリンピックを通して得られる大切な学びのひとつです。これは、ろう者だけの問題ではありません。高齢者の中にも、きこえにくい人は多くいます。
　障がいの有無にかかわらず、誰もがより良いコミュニケーションをとれる社会になることを望んでいます。それは、自分たちの家族やお年寄りとの関わり方にもつながるはずです。
　デフリンピックが、そのような変化を促すきっかけになればと思います。

―デフサッカーは、福島県のＪヴィレッジで開催されます。Ｊヴィレッジは福島県の復興のシンボルであり、サッカーの聖地でもあります。そんなＪヴィレッジでデフサッカーが開催されることにどのよ

うな意味があると感じていらっしゃいますか？

　デフリンピックのサッカー競技が Ｊ ヴィレッジで開催されることは、福島県の復興のシンボルであり、また、サッカーの聖地であるこの地にとって、とても喜ばしいことです。
　Ｊヴィレッジは日本のサッカーにとって欠かせない存在です。そうした場所でデフリンピックが開催されることは、日本のサッカーの歴史を振り返ると、新たなスタート地点となるように感じます。デフリンピックもまた、日本のサッカーと同じように成長していけるのではないかと期待しています。

　東京 2020 オリンピックの聖火リレーもＪヴィレッジからスタートし、その成果が今につながっています。だからこそ、世界中の人々にＪヴィレッジの価値をもっと知ってもらいたい。“サッカーの聖地”として広めていきたいと強く思います。

―デフリンピックの開催をきっかけに、障がい者サッカー全体の発展にどのような期待をお持ちですか？

大切なのは、「理解する」こと。障がいについて、まだまだ知らないことがたくさんある。きこえない人は、きこえないからスポーツができないと思われがちだが、少しでも関わることで、新たな気づきや理解が生まれると思う。

そして、オリンピック・パラリンピックを開催した日本で、デフリンピックが開かれるのは、とても意義深い。

世界と比べると、日本の障がい者理解は、まだ十分とは言えません。だからこそ、良いロールモデルになれたらと思っています。

—最後に、応援してくださるみなさんへメッセージをお願いします。

多くの方々の協力が必要なので、ボランティアなどを通じて、地元の皆さんに積極的にご参加いただきたいです。

東北の皆さんのおもてなしは素晴らしく、そうした文化の交流もオリンピックと同じように、デフリンピックの魅力の一つになると思います。

ぜひ、思いを共有しながらご参加ください。